



私は透明な板に挟まれていた。身動きは取れなかった。透明な板なので、向こうが見えるはずだった。しかし、透明な板の向こうはぼんやりと白くぼやけていて、なにがあるのやら、分からない状態だった。

身動きが取れないことに、不思議と窮屈さは感じなかった。ただそこにいる安心感。それだけがあった。

しばらくそうしていると、顔と板の間に、少し隙間があることがわかった。私は、少し顔を引いた。そうすると、板に映った自分の顔が見えた。試しに、私はニッと笑ってみた。すると、2.5秒後くらいに、板に映った顔もニッと笑ったのだ。なんなんだ、このタイムラグは。

これは、鏡ではない。と私は自分に言い聞かせた。これは鏡ではないから、笑った後、すぐに、ニッとしないのだ。では、これはなんなんだろう。影だろうか。いや、影は輪郭を映すだけ。あんなにニッとほしない。

眉間にグッとしわがよった。その2.5秒後、目の前の顔の目の上の眉間に、グッとしわがよった。そのとたん、眉間のしわを中心として、顔全体、体全体へとしわがどんどん広がっていった。

やがて一枚の紙が丸まるように、その像はくしゃくしゃと消えて行った。

目の前には、もう何も映ってはいなかった。

またゴーンと鐘が鳴った。またと思ったが、初めて聞いた音だった。ここにいることを許されるような響き、心地よい響き。

透明な板に映っていた自分が持って行ったもの。うつしていった自分の嫌な部分。しわしわになって、全部きれいに消えてしまった。今いる私は、完璧な状態だった。さあ、もう少しだ。もう少し、ここにしよう。そして私はまた、目を閉じた。また、と思ったが、ここで目を閉じたのは、瞬き以外で初めてのことだった。どこまでも続く透明な板の中で、私は永遠の眠りについていた。

その2.5秒後、どこかで大学生の男の子が、くしゃくしゃに丸まった大学ノートのを拾った。大学生が、大学ノートを広げると、そこには、ニッと笑いながらグッと眉間にしわをよせた人物がかたどられていた。

【2017-11-16】指さし小説 第20話

<http://p.booklog.jp/book/118579>

著者：かっこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile>

今回のテーマは、「版」でした。ちょうど、版画をしようと思っていた矢先だったので、なんとタイムリーと思いながら作りました。こういうことが、起きるんですねえ。世の中には。だから楽しくて、やめられません。

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/118579>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト